

こん の のぶ ゆき
昆 野 伸 幸

学位の種類	博士(文学)
学位記番号	文博第 204 号
学位授与年月日	平成17年9月8日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	東北大学大学院文学研究科(博士課程後期3年の課程) 文化科学専攻
学位論文題目	<皇国史観>研究序説
論文審査委員	(主査) 教授 佐藤弘夫 教授 佐藤伸宏 助教授 安達宏昭

論文内容の要旨

本論が主に扱う時代は、大正初めから昭和一八年までの、西暦でいえば一九一〇年代から一九四三年までの約三〇年の期間である。そして取り上げる人物は主に大正・昭和時代の国史学者平泉澄(明治二八～昭和五九<一八九五～一九八四>)と代表的なアジア主義者、国家改造運動家大川周明(明治一九～昭和三七<一八八六～一九五七>)の二人である。この両者の思想の分析を軸として、当該期における国体論の展開史を明らかにすること、これが本論の目的である。

そしてこの目的を達するために、本論は以下のような構成を採用した。

序論

第一部 神代から中世へ

第一章 大川周明『列聖伝』考

第二章 平泉史学と人類学

第三章 平泉澄の中世史研究

第二部 国体論の対立

第一章 平泉澄の「日本人」観

第二章 大川周明の日本歴史観

第三章 大川周明『日本二千六百年史』不敬書事件再考

第三部 「世界史」の可能性

第一章 「皇国史観」の相克

第二章 大川周明のアジア観

結論

まず序論においては先行研究の整理と問題点の指摘、そしてそこから導き出される本論の立場について論じた。本論が扱う時代に対し、これまでトータルな歴史像を与えてきた分析視角として日本ファシズム論、「総力戦体制」論の二つが挙げられる。両者の提示する歴史像には大きな違いがあるものの、国体論を非合理的なものの代表、変化のない保守固陋な思想と捉える点では共通している。つまり、かえって国体論に着目し、そのイメージを刷新することによって、両者の枠組みを捉え返すことや、さらにはすれ違いの多い両視角を架橋することができる。

以上のような問題意識から本論は国体論に注目するが、その際国体論を歴史思想のレベルにおいて検討する。つまり〈皇国史観〉を検討の俎上にのせる。そして〈皇国史観〉に関する先行研究の整理・問題点の指摘から導き出される本論の立場は以下の三点である。①資料用語としての「皇国史観」と分析概念としての〈皇国史観〉とを区別する（「皇国史観」はあくまで〈皇国史観〉の視角から検討される一分析対象）、②昭和一〇年代に本格化する〈皇国史観〉の特質（前近代、明治・大正期における国体中心の国家主義的歴史観一般との質的相違）を解明する、③〈皇国史観〉を特定の人物・テキスト（平泉澄・『国体の本義』）によって代表させるのではなく、それらを相対化しようとするような総体的な視角に立つ。

この三つの立場から、本論は〈皇国史観〉を保守固陋の画一的なイメージで捉えるのではなく、その内部に対立や多様な方向性を認め、動態的に把握する。より具体的にいえば、昭和期における国体論の動向を、明治期以来の伝統的国体論と昭和期に再編された新しい国体論との対抗関係として叙述する。この対抗関係において重要な役割を果たした大川・平泉・「皇国史観」論に国体論の自己革新を見出し、それと日本的総力戦体制との関連を探る。これが本論の最終的目標である。

第一部においては大川の天皇観・神代観、平泉の神代観・中世観を検討した。その分析は単なる個別的なものではなく、全体として「神代から中世へ」という大きな時代思潮の変化を明らかにすることを主眼としている。この点の解明こそ、第二部において主題となる昭和一〇年代における新しい国体論の成立＝国体論の自己革新を準備した歴史的前提を確認することになるのである。

第一部第一章では、大川における『列聖伝』編纂と彼の宗教観との関連を検討した。大正二（一九一三）年六月頃一応完成した『列聖伝』は、国民生活の中心としての皇室・「国民の天皇」という皇室・天皇観を本質としていた。そのためその主張に不適切な記述は削除され、到底客観的な「史料ノート」（橋川文三氏）とはいえない性格のものであった。ただし、『列聖伝』は『大政紀要』や大川の恩師たる東京帝国大学教授姉崎正治とは異なり、実質的には南北朝両立論に立つ点で独自性を有していた。そして『列聖伝』と『大政紀要』・姉崎とにこのような相違をもたらしたのは、両者における神代への依存度の違いであろう。神代に依拠しない『列聖伝』は、その分だけ天皇制の神話から自由に歴史を捉え得たのである。

大川においてそのような態度が可能となった背景には、姉崎正治に師事して学んだ宗教学による知見があった。特に『列聖伝』以降顕著になる大川における「共同生活」の中心という皇室観、国民の宗教的对象という天皇観は、まさに彼の宗教観を濃厚に反映したものであった。彼は、自らの宗教観の延長に天皇を捉え、『列聖伝』を編纂したのである。彼は、むしろ天皇を相対化する契機すら含みながら、神代から自立して天皇の万世一系を正当化してみせたのである。大川は姉崎同様の神代観を抱きつつも、もはや姉崎ほどナイーブに神代に依存することはできなかつた。姉崎と大川とにおける神代への依存度の違いは、両者の個性であるとともに、まさに神代の占める社会的意義が低下しつつあった、明治から

大正への潮流の移行 ― 神代の占める社会的意義の低下 ― を体現するものでもあった。

第一部第二章では、平泉における西村真次＝人類学批判のありようを検討した。大正末から昭和初期にかけての平泉の思想は、多分に人類学との対抗を重要な契機として成立しているといえる。一次大戦後における国際協調・デモクラシーの流行という「世界の大勢」を背景にして、普遍的な「人類」を対象とする人類学が盛行し、その中で西村真次は人類学によって歴史学を融合することを企図した。人類学の知見は、久米邦武筆禍事件以後聖域と化していた記紀神話にも及び、相対化されることとなった。神話の価値は明治期に比べて低下し、その穴を人類学によって提示された新たな古代像が補填していった。平泉の営為は、このような人類学の立場からする「歴史」の範囲・使命への侵蝕＝「人類」による「民族」「国民」の吸収・解消に対する防衛反応であるとともに積極的な攻勢でもあった。

まず平泉は、「歴史」「人格」「国家」という三位一体に拘ることによって、歴史学の対象時期を神武建国以後と見なし、神代や先史時代への言及には禁欲的であった。そして歴史学の独自性・歴史家の使命を強調した彼は、価値の下がった神代を改めて持ち出し、称揚することなどなかった。あくまで「歴史」の範囲で思考した彼にとって、神話と歴史を融合させることなど論外であり、両者は明確に弁別され、「歴史」から神話は排除された。平泉史学の根拠としてあったのは決して神話ではなく、その点で『国史眼』とは明らかに懸隔があったといえる。「教育勅語」をはじめ、明治期の国体論が天皇支配の正統性根拠を神話に求め、その神話と歴史を融合させていたことを考えれば、平泉史学における神話の「歴史」からの排除は、まさに新しい国体論の誕生を準備する、極めて重要な意味を有していたのである。記紀神話への安易なもたれかかりを拒否し、「歴史」の内部で思考した平泉は、歴史家に対して主体性の確立を要求するとともに、「日本の中世」にこそ自らの実践の根拠を置いた。ここに神代は去り、記紀神話とは断絶した武士の世＝中世が国体を担う、新しい時代が幕を開けるのである。

第一部第三章では、平泉の中世観に焦点を当てて、彼の中世史研究の歴史的意味を考察した。大正期、歴史学の世界において神代・古代史研究の地盤沈下、中世史研究の盛行、即ち、「神代から中世へ」という重点の移行が生じた。さらに「国家」から「社会」へとという思想潮流の変化が重なり、特に「社会」の領域と結び付いた中世史が盛行した。そしてかかる「社会」的中世史研究の盛行に反発した平泉は、「国家」的中世史を志向した。彼は、「世界の大勢」＝デモクラシーの影響下に形成された新しい中世観（三浦周行等）に対抗して、徹底した中世暗黒時代観を以てこれに応えた。平泉の中世観は、歴史を忘却した暗黒時代と捉える現代観の反映であり、現代に対する強烈な批判意識は彼をして現代「更生」へと向かわせることになった。現代を「更生」せんとする彼の使命感は中世観へと投影され、その結果、彼にとって中世は暗黒時代と表裏に「更生」の時代として表象されることになったのである。彼は現代を暗黒時代たらしめた要因として、官学アカデミズム史学、マルクス主義史学を指定した。その上で、かかる現代歴史学を総体として批判することを目的とし、「世界の大勢に眩惑して」歴史を忘却した現代日本に誇るべき歴史を回復するために自らの歴史学の構築を目指した。つまり、彼はかかる自らの歴史学を通じて現代「更生」を志向したが、その「更生」像は、民衆よりも「偉大なる個人」を重視する「上からの更生」であった。彼は、暗黒時代たる現代を誇るべき「大和魂」あふれる時代へと「更生」せんとしたが、かかる彼の使命感が反映されて、彼の中世観は、「偉大なる個人」が活躍する、「大和魂のみがかれた」時代として帰着することになった。彼の中世史研究は一貫して現代「更生」の念に支えられていた。そのため昭和八（一九三三）年、平泉が対外危機に衝撃を受けて「更生」の念を強めるにつれて、彼の問題意識は中世史研究の枠内に収まりきらなくなるとともに、彼は全国民に武士道＝「義勇の精神」を体現させ、武士＝「真の日本人」と化すことで、「上からの更生」方針を部分修正し、「下から」の主体性を汲みとる翼賛的な「更生」像を構想していった。その変化を通じて彼の主張は広汎な

層に受容されるようになり、ここに彼の「国家」的中世史のヘゲモニーは確立したのである。

第二部においては平泉の「日本人」観、大川の日本歴史観・不敬事件を検討した。第一部での分析を踏まえたかかる作業を通じて、日本の総力戦体制を支えた新しい国体論の誕生を示し、あわせてそれと伝統的国体論との対立状況を剔抉した。

第二部第一章では、平泉の「日本人」観について分析した。彼の「日本人」観には、昭和八年八月を画期として重要な変化が認められる。昭和初期の彼は、日本歴史を〈日本的なるもの〉の貫通する歴史と捉え、その一貫性を「自然な展開」と見なしていた。しかし、昭和八年八月、「真の日本人」化という課題が表明されて以後は、日本歴史を「自然」な流れとする見方を否定し、それを克服する形で、「難儀不自由」を甘受して「真の日本人」となる修練が重視された。則ち、自然的「日本人」観から意志的・主体的「日本人」観への転換である。彼は、強固な単一民族観を基礎に、『国体の本義』＝明治以来の伝統的国体論とは断絶して、絶えざる修練によって「真の日本人」になることを内地「日本人」に求めた。それはまさに伝統的国体論の限界を突く新しい国体論の成立を意味するものであった。彼の思想は、内地における「偽の日本人」を排除、抑圧し、国民の強制的均質化を行う上でより大きな機能を果たした。かかる彼の思想は、『国体の本義』とは異なり、徹底的な「修練」を説く『臣民の道』へとつながっていった。

この平泉の単一民族観を基礎にした一国歴史学は、「日本人」の範囲を、同一民族であり、内地に生まれ育ち、「歴史」を共有し得る存在に限定し、異民族の日本人を排除するものであった。その点で、一五年戦争下、建前としては異民族の同化政策をとった大日本帝国の方針とは相容れないものであり、少なくともそれ自体では多民族帝国日本の支配イデオロギーとしては不十分なものであった。

第二部第二章では、大川周明の日本歴史観について論じた。戦時期日本では、内においては総力戦体制構築のために強烈的な国民統合と体制内変革を目指し、外に対しては既成の国際秩序を否定して侵略戦争を遂行し、世界再分割を図って、様々な思想や運動が生じていた。大川の日本歴史観の特質は、まさに当該期において有効な思想たりうる要件を備えていた。即ち、それは、第一に〈日本的なるもの〉が一貫する歴史であり、第二に「革命」の連続の歴史であり、第三に不断に外来思想に「方向を与へる」ことを続けてきた歴史であった。そのうち、第二の特質は、国内的に、自らの「第二維新」を正当化し、第三の特質は、対外的に、日本を盟主とするアジア解放戦争（＝「大東亜戦争」）を合理化するものとして機能した。彼の日本歴史観は、〈日本的なるもの〉が一貫するという特質を基盤に、現実政治での国家改造、アジア解放という内外の課題に対応する特質を兼ね備えていた。

戦時期において、かかる伝統的国体論（＝「皇国史観」）では時代の求める総力戦体制の構築に十分応えきれない限界は、誰の目にも明らかであった。そして当時の国家主義陣営にしても、「観念右翼」、左翼からの転向者、アジア主義者など多様な人物を内包し、一致団結して総力戦体制構築に向かうことなど到底無理な注文であった。いくら「皇国史観」が鼓吹されたところで、統合力を弱めた国体論では国家主義陣営をまとめきれない状況に至っていた。かかる状況に対して彼は、神話に依拠しない合理的立場から、日本国民共同の過去の記憶＝国民共有の「伝統」を創造した。そしてそれは、分裂の危機を恒常的に抱えていた国家主義陣営を統合するものでもありえた。英雄主義に終始した「皇国史観」に対し、彼の創造した栄えある「伝統」は、まさに下から平凡な国民一人ひとりが参画できるものであった。

第二部第三章では、大川のベストセラー『日本二千六百年史』（以下『年史』と略記）をめぐる不敬事件を、昭和一〇年代における国体論の流れの中で考察した。昭和一〇年代、国体の永遠性を信じ、現在への没入と国民の天皇への随順を強調する伝統的国体論は、総力戦下において国民の自発的動員が要請

される中、限界を露わにした。かかる事態に対応して、国体が神話に基づいているだけでは不十分だと捉え、国民の積極的な自発性に支えられた翼賛を目指す方向で国体論の再編が行われた。大正期に進行した「神代から中世へ」という移行を歴史的前提にして、昭和一〇年代、まさに総力戦体制の構築が至上課題とされる中で、明治期以来の伝統的国体論からの脱却が試みられるようになる。

このように当時の危機的状況への対処策が模索される過渡期において、『年史』は国家改造と対外侵略を正当化する「新たな国体の明徴と日本精神の認識」を提示したものとして受け取られた。国家改造を通して国民の自発性を吸い上げようとする『年史』は、新しい国体論の流れに棹差すものとして機能し、伝統的国体論と対立し、特に対外政策の面と関連して批判を受けた。と同時に『年史』においては、平泉と対照的に、国民の主体性発揮が皇統の翼賛に直結せず、万世一系の国体の再確認に止まらない国家改造と結び付いていたために、新しい国体論の側からも批判を受けることになった。二つの国体論どちらも異なる独自性を有していたが故に両者から批判された『年史』は、結局改訂を通じて特質＝魅力の根源を温存しえた。支配イデオロギーたる国体論の一元化が恒常的に失敗し、対立が続く中、その危機に処して、『年史』は国体論の総力戦的再編の一つの姿を提示し、戦時期において最も影響力の強い「指導原理」の地位を確立していったのである。

第三部においては「皇国史観」の相克、大川のアジア観を分析した。対外策の方針をめぐる伝統的国体論側の内紛＝伝統的国体論内部からの「革新」論の登場を踏まえて、昭和一〇年代に「世界史」はいかなる形態において存在しえたのかについて解明した。

第三部第一章では、昭和一八（一九四三）年から流通する「皇国史観」という用語をめぐる伝統的国体論の内紛について検討した。国民精神文化研究所（以下精研と略記）の若手所員吉田三郎の思想と文部省側との間には共通点があり、両者はともに伝統的国体論の枠内から、平泉澄の思想＝新しい国体論と対抗した。ただし、吉田の思想は、様々な点で文部省主流派とは重要な相違点をもつ。この相違を背景に彼は現実の文部行政を批判し、かつ「皇国史観」を論じた。そしてこの両者の相違は、それぞれの「皇国史観」解釈にも反映した。即ち、当時使われた「皇国史観」には二系統の解釈系列が存在した。文部省及び精研上層部と吉田に代表される精研中堅層とは、同じ「皇国史観」という用語を採用しつつも、そこに込めた意味は対照的であり、両者は相反目しあった。

伝統的国体論の限界が露わになった結果、新しい国体論側に続き、伝統的国体論の内部からも吉田ら批判者を生み出すことになった。しかし、『国体の本義』『国史概説』といった国民教化策の流れを自己正当化することに腐心する体制側は、獅子身中の虫たる吉田ら「革新分子」の「皇国史観」を弾圧し、彼らの「皇国史観」が有した批判性を去勢した。「皇国史観」は文部省及び精研上層部が専有する用語となり、画一化が成功したかに見えたが、それでも到底正統的位置を占めるには至らなかった。

第三部第二章では、大川の東西文明対抗史観に基づいた「世界史」における一方の主体たるアジア観について検討した。大川の現代アジアに対する評価は、アジア各国における過去の「伝統」がどの程度現在に現れているかという点から行われるものであり、どの国を見るにしても共通していた。そして表面的には異なる評価の背後においても、アジア各国の「伝統」があくまで大川によって主観的に設定される点では本質的に同じだった。アジアの国民にも日本人にも絶望した昭和一一（一九三六）年に彼の本質的なアジア人観——「亡国民」「道徳的に低度の国民」「家畜」——は露呈する。

また、大川の戦時下における盛んな言論活動は「大東亜戦争のイデオログ」と評されてしかるべきものであったろう。しかし、彼のアジア論は、文部省の「日本世界観」や「八紘一宇」といった観念とは無縁なものであった。彼は、当時の議論と異なり、天皇や「八紘一宇」といった日本的価値から距離

をとって、むしろ批判的に対外思想戦として有効な本当の「日本精神」を追及していた。彼においてそのような態度が可能だったのは、イスラムに関する豊富な知識を背景に、「日本精神」とイスラム教をオーバーラップさせて把握することで、政府の「大東亜共栄圏」論とは異なる「全体としてのアジア」を構想し得たからであろう。しかしそもそもイスラムには東洋対西洋という二項対立を止揚する意義がある。彼はイスラムに着目しつつも、あくまでこの二項対立図式を手放すことなく、東西文明対抗史観に基づいた「世界史」理解に固執した。

最期に結論を述べて、序論において提示した本論の立場に対する解答を示した。

①〈皇国史観〉と「皇国史観」とを安易に同一視することは厳に慎まねばならない。たとえ狭義の理解だとしても、〈皇国史観〉＝『国体の本義』『国史概説』とする理解は、「皇国史観」＝『国体の本義』『国史概説』という、当時一般にはほとんど定着しなかった文部官僚の願望を、あたかも実態であるかのように私達に刷り込みかねない。「皇国史観」と〈皇国史観〉は長い間区別されずにきたが、歴史的用語をそのまま分析概念として一般化するのは、当時の実態から乖離し、「皇国史観」の影響力を過大に評価することにつながる。

②昭和一〇年代、伝統的国体論の綻びを突く形で新しい国体論が現れ、国体論は時代に応じて自己変革を試みる。神代の尊重、「中今」という時間意識、自然的「日本人」観の三点を特質とする伝統的国体論に対し、新しい国体論は悉く反駁する。即ち、それは、神代に天皇統治の正統性根拠を置かず、歴史的時代実践の根拠を求め、意志的「日本人」観を打ち出した点で、伝統的国体論とは断絶するものであった。「神代から中世へ」という時代思潮の移行を背景にしたこの新しい国体論の登場を以て、昭和一〇年代の〈皇国史観〉は、明治期や前近代における「皇国」意識の強い歴史観一般と質的に異なるものとなる。そしてこの新しい国体論の出現を受けて、伝統的国体論は、その内容を一層先鋭化させていくとともに、「革新分子」をも生み出していった。

③以上のように〈皇国史観〉は、国体論をめぐるダイナミックな動きそれ自体を示す概念であり、すべからず内部に対抗関係を有したすぐれて動態的なものとして総体的に捉え返されるべきである。この対抗関係を軸において考察してこそ、『国体の本義』や平泉史学の歴史的意義が十全に理解できる。〈皇国史観〉とは、守旧的・反動的に固着したものでは決してなく、平泉や大川、吉田など、その内部において諸課題に応じた新しい動き＝自己変革の契機、多様な可能性を生み出していた、すぐれて動態的な概念なのである。

日本ファシズム論・「総力戦体制」論の両視角は、ともに新しい国体論の存在を看過した。それは神々の世界から自立して主体的に国体を担う「真の日本人」を錬成するものであり、この新しい国体論と総力戦体制とが結合した。日本的総力戦体制は、自己革新を果たした国体原理と総力戦原理との結合から成り立っていたのである。

論文審査結果の要旨

本論文は、執筆の目的などを記した序論と、本論にあたる第一部・第二部・第三部、および結論から構成される。

序論では先行研究の整理と研究史上の問題点の指摘、およびそこから導き出される本論文の課題について論じられる。

まず、本論文が扱う時代を対象とする二つの代表的な分析視角である日本ファシズム論と「総力戦体制」論においては、国体論・〈皇国史観〉が非合理なるものの代表として把握され、その中身そのものについては立ち入った分析がほとんどなされてこなかったことを指摘する。その上で、本論文の目的は〈皇国史観〉を従来のごとき保守固陋の画一的なイメージで捉えるのではなく、その内部に対立や多様な方向性を認めて動態的に把握し直すとともに、それと日本的総力体制論との関連を探ることにある、と述べる。

第一部「神代から中世へ」においては、昭和10年代に花開く新しい国体論の歴史的前提を確認すべく、大川周明と平泉澄の天皇観・神代観・中世観などが取り上げられる。

第一章「大川周明『列聖伝』考」では、大川の初期の著作である『列聖伝』について、その編纂の背後にひそむ大川の宗教観が考察される。大川はその師である姉崎正治の宗教学から大きな影響を受けながらも、姉崎とは異なり、天皇の万世一系を正当化するにあたって神代に依拠しなかったこと、それは両者の個性の相違によるものであるとともに、明治から大正にかけて起こる社会全体の思潮の変動（神代の社会的意義の低下）を背景としていること、などを指摘する。

第二章「平泉史学と人類学」では、平泉における人類学批判が取り上げられる。大正末から昭和初期にかけての平泉の思想形成は、人類学の伸長に対する強い危機感をバネに、それへの対抗を重要な契機としてなされたものとされる。従来の研究にはなかった、新しい指摘である。また大川同様、平泉も歴史学の対象時期を神武建国以後とみなし、神代や先史時代への言及には禁欲的であったこと、平泉史学における神話の「歴史」からの排除は記紀神話への安易なもたれかかりを拒否し、武士の世＝主体性回復の時代としての中世に目を向けさせる契機となったこと、などが論じられる。

第三章「平泉澄の中世史研究」では、平泉がなぜ中世という時代を研究対象として選んだかを考察している。大正期の歴史学界では、神代・古代史研究の地盤沈下と中世史研究の盛行という現象が起こった。また、「国家」から「社会」へという視点の転換が生じ、「社会」の領域と結びついた中世史が流行した。平泉はデモクラシーの影響の下で形成された、民衆に光を当てるこうした新しい中世観を拒否し、逆に中世を、歴史を忘却した暗黒時代と捉えた。それは現代を暗黒時代と捉える平泉の同時代観を反映したものであると同時に、暗黒の世＝現代を更生せしめる主体である「真の日本人」像の創出と密接に結びついたものだった、とする。

第二部「国体論の対立」では、平泉と大川の思想分析を通じて日本的総力戦体制を支えた新しい国体論の誕生を示し、それが伝統的国体論と対立する状況を描き出そうとする。

第一章「平泉澄の「日本人」観」では、昭和期の平泉の思想を一貫したものと捉える通説的見解に対して、昭和8年（1933）8月を画期として、平泉の思想に決定的な転換が生じたことを論じる。昭和初期の平泉が、日本の歴史の展開を〈日本的なるもの〉のおのずからなる展開と見る歴史観を有していたのに対し、昭和8年以降は、修練を積み重ねることによって意志的・主体的に「真の日本人」になることの重要性が力説された。本論文はこれを、平泉における自然的「日本人」観から意志的「日本人」観への転換と捉え、そこに明治以来の伝統的国体論とは異質な国体論の誕生を見出している。さらにそれは単一民族観を基礎にした一国歴史学である点において、多民族帝国日本の支配イデオロギーとしては不十分なものであったことを指摘する。

第二章「大川周明の日本歴史観」では、大川周明の歴史観が論じられる。大川の歴史観は、国内的には課題となっている国家改造＝「第二維新」を正当化し、対外的には日本を盟主とするアジア解放戦争

を合理化する点において、当時の国家政策を遂行する上でもっとも有効な思想的支柱たりうるものであったと述べる。戦時期日本の国家政策を支えるに足る思想は、伝統的国体論ではなく、むしろ国民一人ひとりが下から国策に参画することを重視する大川の新しい国体論であったとする、注目すべき提言がなされている。

第三章「大川周明『日本二千六百年史』不敬書事件再考」は、大川のベストセラー『日本二千六百年史』をめぐる不敬事件を、昭和10年代の国体論の流れの中で考察する。『二千六百年史』は発行されるや新旧双方の国体論から批判を受けるが、それはこの書がどちらの国体論とも異なる独自性を有していたためであるとする。その独自性は国体論の総力戦的再編の一つの具体像を提示することにより、それゆえ批判を受けながらも、戦時期においてももっとも影響力の強い「指導原理」の地位を確立していったこと、などを指摘する。従来ややもすれば一枚岩と捉えられがちな国体論の内部に、深い見解の対立と激しい論争があったことを論証する、注目すべき成果である。

第三部「『世界史』の可能性」は、国体論内部の論争をふまえつつ、昭和10年代に「世界史」がいかなる形で存在しえたのかという問題を考察する。

第一章「『皇国史観』の相克」は、昭和18年(1943)から流通する「皇国史観」という用語をめぐる、伝統的国体論内部の対立を検討する。「皇国史観」の解釈をめぐるのは、それを唱道した文部省や国民精神文化研究所内部にも二系統の解釈が存在したこと、文部省主流派は吉田三郎らの「革新分子」を強引に排除しようとしたこと、それが成功したにもかかわらず、画一化された「皇国史観」は正統的位置を占めるには至らなかったこと、などが論じられる。

第二章「大川周明のアジア観」は、大川の東西文明対抗史観におけるアジアの位置づけについて考察する。大川の戦時下の盛んな言論活動は「大東亜戦争のイデオログ」と評されるにふさわしいものだが、大川の特徴は当時の議論の主流とは異なり、天皇や「八紘一宇」といった日本的価値から距離をとりつつ、対外思想戦として真に有効な「日本精神」を追究したことにあった。その一つが「全体としてのアジア」の構想だった。その背景にはイスラムに関する豊富な知識があり、「日本精神」とイスラム教をオーバーラップさせて把握することで、大川は「大東亜共栄圏」とは異なる「全体としてのアジア」をイメージすることが可能となったとする。

結論では、序論で述べた本論文の課題と関連づけながら、本論文の論旨がまとめられ達成点が示されている。

本論文の問題設定は明確であり、論述は明晰である。従来画一的なイメージで捉えられてきた〈皇国史観〉の内部に踏み込んで、それを動的・立体的に把握し直そうとする試みも、かなりの程度成功をおさめているといえる。本論文が斯学の発展に寄与するところ大なるものであることは疑いない。

よって、本論文の提出者は、博士(文学)の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。